

高等学校において気になる行動を示す 生徒の特徴に関する予備的検討

宮 寺 千 恵

千葉大学教育学部

A preliminary study on the behavioral characteristics of high-school students requiring special attention

MIYADERA Chie

Faculty of Education, Chiba University

本研究では、高等学校での行動面や対人面、学習面で困難を示す生徒を「気になる行動を示す生徒」とし、教員は生徒の具体的にどのような行動を気になる行動と捉えるのか調査を行った。因子分析の結果、気になる行動は学習面での困難さ、衝動性や不注意、対人関係の築きにくさ、抑うつ傾向、感情コントロールの困難という5つの行動に分類された。そのうち、教員がとりわけ気になる行動として、学習面の困難と対人関係の築きにくさが挙げられた。診断の有無による比較をしたところ、診断なし群は診断あり群に比べて得点が高い傾向にあった。この結果から、診断なし群の中には保護者をはじめとする周囲の理解が得られずに、気になる行動が見過ごされてきて、有効な支援を受けてこなかった生徒もいることが示唆された。診断の有無に関わらず、保護者や教員をはじめとする周囲の理解を得ながら、支援を進めていくことが必要である。

In high-schools there are some students who require special attention by teachers because they are not good at getting along with other people or they have difficulty in learning. We investigated the behavioral characteristics of such students by sending a questionnaire to high-school teachers. The factorial analysis showed that their behaviors can be classified into five types: (i) failure in achievement tests, (ii) impulsivity and inattention, (iii) difficulty in associating with others, (iv) depression, and (v) difficulty with the emotional control. In addition, the score was higher for the group without diagnosis than the group with diagnosis. This result implies that students without diagnosis have not been paid sufficient attention thus far and they have not been provided proper supports.

キーワード：特別支援教育 (Special Education) 高校生 (High-School Students)

注意欠陥多動性障害 (Attention Deficit Hyperactivity Disorder) 学習障害 (Learning Disability)

アスペルガー障害 (Asperger Syndrome)

問題と目的

平成22年度学校基本調査によれば、高等学校への進学率は98.8%であり、社会に出る前の教育機関として高等学校が期待される役割はますます大きくなってきている。このように様々な生徒が進学するようになったことを受けて、高等学校における特別支援教育の取り組みが近年始まっている。平成19年度からは文部科学省による「高等学校における発達障害支援モデル事業」が実施されている。平成21年8月には、文部科学省が「高等学校における特別支援教育の推進について」と題したワーキンググループの報告を発表し、その中で高等学校における支援体制作りや入試での配慮を含む今後の特別支援教育の在り方を示している。

高等学校における気になる生徒の調査に関しては、本郷・相澤・飯島・半澤・中村 (2009) がある。この研究

では高等学校で気になる生徒の行動について、状況に合わせたコミュニケーションが困難であること、日によって調子の変動が大きいこと、不得意なことに取り組もうとしないことなどを上位に挙げている。また、気になる行動が診断名のついていない生徒にも顕著に見られたことから、診断名の有無に関わらず支援のニーズを把握することが重要であると述べている。

本研究では、高等学校での行動面や対人面、学習面で困難を示す生徒を「気になる行動を示す生徒」として、高等学校の教員が生徒の具体的にどのような行動を気になる行動と捉えるのかについて調査を行った。また、気になる行動とそれらに対して必要な支援の在り方について検討することを目的とした。

方 法

対象者：

千葉県内の高等学校ならびに群馬県の一部の高等学校

連絡先著者：

に承諾を得て、調査用紙を送付した。調査用紙の送付および回収は20XX年9月～10月であった。

調査では各学校で気になる行動を示す生徒に関して回答するよう求め、該当する生徒1名につき調査用紙を1部記入するよう依頼した。回答が得られた生徒は県立高校63名（うち定時制11名）、私立高校32名（うち通信制17名）の合計95名であった。回答のあった95名のうち、1名の生徒については未記入項目が多くあったため分析から除外した。男子生徒が70名、女子生徒が21名、未記入が3名であった。学年は1年生38名、2年生24名、3年生23名、未記入および卒業生9名であった。

調査用紙の記入者は該当する生徒をよく知っている教員であり、担任47名（全体の49.5%）、生徒指導担当14名（14.7%）、養護教諭16名（16.8%）、カウンセラー3名（3.2%）、その他12名（12.6%）であった。

調査内容：

(1) 生徒の行動に関する調査

調査項目は注意欠陥多動性障害、学習障害、アスペルガー障害の診断基準（DSM-IV-TR（APA, 2003）およびICD-10（WHO, 2005））、CBCL（Child Behavior Checklist）日本語版（井潤・上林・中田・北・藤井・倉本・根岸・手塚・岡田・名取, 2001）の攻撃性、注意、抑うつ各尺度に基づいて独自に作成した。上記の項目に合わせて、高等学校で日常的に困難さが予想される生活面や学習面での特徴的な行動に関する項目を高等学校の教員への聞き取りを参考にして追加し、合計70項目から構成された。

回答は同年齢の生徒の行動と比べて、その項目の行動がどの程度よく見られるかについて5件法で求めた。

なお、上記の調査項目を作成するにあたり、高等学校の教員2名に意見をいただいた。

(2) 支援に関する調査

調査項目は支援の必要性に関する6項目であった。そのうち4項目は、「学習面について個別に対応する必要性を感じるか」や「生徒同士の関係について学ぶ必要性を感じるか」など日常的な支援の必要性に焦点を当てた。他の2項目では、学習の遅れや対人関係の面でその後の進路にどの程度不安を感じるかを尋ねた。回答は、教員が各項目についてどの程度強く感じるかを5件法で求めた。

結 果

1. 「生徒の行動に関する調査」の因子分析結果

生徒の行動に関する調査について検討を行った。はじめに、分布の偏りが著しい項目や回答者から質問の意図が不明瞭であると指摘された項目、未回答が多かった項目を削除した。

次に、残りの37項目について因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、因子負荷量の低い2項目を削除した。さらに、35項目の回答について因子分析を行った結果、解釈可能な因子が5因子抽出された（Table 1）。第1因子は、「小学校で学習する内容が身についていないか」、「文章を書くことに困難があるか」など9項目か

ら成り、「学習面における困難」（ $\alpha = .912$ ）と命名した。第2因子は、「反抗的で、教職員に口答えするか」、「クラスの規律を乱す行動をよく起こすか」など9項目から成り、「衝動性および不注意」（ $\alpha = .877$ ）と命名した。第3因子は、「周囲の人への接し方がごちないか」、「友達への接し方が一方的か」など6項目から成り、「対人関係の築きにくさ」（ $\alpha = .814$ ）とした。第4因子は、「規則にとらわれ過ぎるか」、「神経質で、緊張している様子か」など6項目から成り、「抑うつ傾向」（ $\alpha = .810$ ）とした。第5因子は、「頑固、不機嫌、イライラする様子が見られるか」、「気分や感情が揺れやすく、変わりやすいか」など5項目から成り、「感情コントロールの困難」（ $\alpha = .851$ ）とした。

また、下位尺度得点は下記の通りであった。ここでの下位尺度得点とは、それぞれの因子における下位尺度の合計得点を項目数で割った項目平均値である。第1因子の下位尺度得点は3.348、第2因子は2.689、第3因子は3.225、第4因子は2.667、第5因子は3.073であった。

2. 全体的な傾向について

各項目の平均得点について、「生徒の行動に関する調査」での得点が高い項目をTable 2に示した。「課題や活動を順序立てて取り組むことが困難か」や「小学校で学習する内容が身についていない」など第1因子を構成する項目が上位に占める割合が高かった。次いで、「授業に集中できない、長い時間注意を持続できないことがあるか」、「外からの刺激によって容易に注意をそらされるか」など第2因子を構成する項目や、「楽しみ、興味、成し遂げたことを他人と共有することがあるか」（逆転項目）、「周囲の人への接し方がごちないか」など第3因子を構成する項目において、得点が高くなった。

また、「支援に関する調査」の項目を見ると、教員の心配事および今後の支援の必要性においてもっとも優先順位が高い項目は対人関係に関わることであり、その次に学習面に関わる項目が続いた（Table 3）。

3. 診断の有無による違いについて

対象の生徒のうち、診断のついていない生徒（以下、診断なし群）は56名、診断のついている生徒（以下、診断あり群）は29名、未記入は9名であった。

各項目での平均得点を従属変数、診断の有無を独立変数としてt検定を行い、各項目における診断の有無による違いを検討した（Table 4）。その結果、「他の生徒や先生をよくからかうか」（ $t(83) = 2.354$ ）、「友達を作ることに興味がなく、自分ひとりの世界を好むか」（ $t(83) = 2.328$ ）、「日常において忘れ物が多いか」（ $t(83) = 2.048$ ）の3項目において、いずれも診断あり群に比べて診断なし群で有意に高いことが示された（ $p < .05$ ）。

次に、各因子における診断の有無による違いを検討した。それぞれの群における各因子の下位尺度得点は以下の通りであった。診断なし群では、第1因子の下位尺度得点が3.461、第2因子が2.774、第3因子が3.384、第4因子が2.758、第5因子が3.072であった。診断あり群では、第1因子の下位尺度得点が3.242、第2因子が

Table 1 因子分析の結果（主因子法，バリマックス回転）

項 目	因 子 負 荷 量					共通性
	1	2	3	4	5	
第 1 因子：学習面における困難（ $\alpha = .912$ ）						
小学校で学習する内容が身につけていないか	0.889	0.086	-0.080	-0.128	0.013	0.821
文章を書くことについて困難があるか	0.863	0.012	-0.055	0.012	-0.043	0.750
英語について困難があるか	0.860	0.026	-0.119	-0.071	-0.007	0.759
文章を読むことについて困難があるか	0.849	0.032	-0.072	-0.051	-0.022	0.731
数学について困難があるか	0.848	-0.010	-0.149	0.005	-0.126	0.756
試験で赤点をとることが多いか	0.764	0.101	-0.226	-0.262	0.032	0.715
字が非常に乱雑か	0.612	0.167	-0.022	-0.258	-0.015	0.470
話をすることについて困難があるか	0.598	0.012	0.439	0.121	-0.123	0.580
課題や活動を順序立てて取り組むことが困難か	0.514	0.089	0.266	-0.180	0.190	0.412
第 2 因子：衝動性および不注意（ $\alpha = .877$ ）						
反抗的で、教職員に口答えするか	-0.067	0.775	-0.247	-0.012	0.211	0.712
クラスの規律を乱す行動をよく起こすか	0.064	0.772	-0.029	0.025	0.324	0.707
会話やゲームにおいて、他人を妨害し、邪魔をするか	-0.115	0.762	0.153	0.059	0.017	0.621
他の生徒や先生をよくからかうか	0.081	0.754	-0.250	0.031	-0.093	0.648
目立ちたがり屋でおどけたりすることがあるか	0.143	0.694	-0.269	-0.013	-0.005	0.575
基本的な生活習慣について身につけていないか	0.122	0.630	-0.205	-0.168	0.316	0.582
授業に集中できない、長い時間注意を持続できないことがあるか	0.211	0.527	-0.023	-0.365	0.082	0.463
外からの刺激によって容易に注意をそらされるか	0.366	0.493	0.119	-0.092	0.134	0.417
日常において忘れ物が多いか	0.384	0.400	-0.293	0.087	0.168	0.430
第 3 因子：対人関係の築きにくさ（ $\alpha = .814$ ）						
周囲の人への接し方がぎこちないか	-0.069	-0.231	0.823	0.155	0.053	0.762
話し方や声の調子が独特で、不自然に感じることがあるか	0.034	-0.015	0.781	0.191	-0.015	0.647
友達への接し方が一方的か	-0.003	0.119	0.755	0.151	0.160	0.633
友達を作ることに興味がなく、自分ひとりの世界を好むか	-0.303	-0.146	0.596	-0.026	0.123	0.485
楽しみ、興味、成し遂げたことを他人と共有することがあるか(逆転)	-0.062	-0.334	0.577	0.011	0.037	0.450
人が多く集まるところや騒々しい場所は苦手か	-0.152	-0.283	0.389	0.449	0.204	0.497
第 4 因子：抑うつ傾向（ $\alpha = .810$ ）						
規則にとらわれ過ぎるか	-0.137	-0.158	0.228	0.786	-0.115	0.726
神経質で、緊張している様子か	-0.148	-0.202	0.108	0.738	0.290	0.702
何事についても完璧でなければいけないと思っているか	-0.154	-0.035	0.064	0.729	0.261	0.629
自分が悪いと思いつぎるか	-0.307	0.199	0.161	0.699	-0.212	0.693
ひとりぼっちで寂しいと訴えることがあるか	0.129	0.338	-0.091	0.610	0.068	0.515
周囲の人から批判されると傷つきやすいか	-0.045	0.024	0.299	0.445	0.398	0.448
第 5 因子：感情コントロールの困難（ $\alpha = .851$ ）						
頑固、不機嫌、イライラする様子が見られるか	0.009	0.342	-0.029	0.268	0.733	0.727
気分や感情が揺れやすく、変わりやすいか	0.050	0.358	-0.023	0.271	0.720	0.724
興味が限定されており、それだけに熱中することがあるか	-0.091	-0.086	0.226	-0.242	0.624	0.514
気が短く、ストレスや要求不満に耐えられないことが多いか	0.051	0.546	0.058	0.202	0.606	0.712
爆発的で予測できない行動がみられるか	-0.076	0.519	0.272	0.134	0.589	0.714

Table 2 「生徒に関する調査」において平均得点が高い項目（上位12項目）

因子	項 目	平均得点
1	課題や活動を順序立てて取り組むことが困難か	3.60
1	話をすることについて困難があるか	3.54
2	授業に集中できない、長い時間注意を持続できないことがあるか	3.51
2	外からの刺激によって容易に注意をそらされるか	3.49
5	興味が限定されており、それだけに熱中することがあるか	3.49
3	楽しみ、興味、成し遂げたことを他人と共有することがあるか	3.46
1	小学校で学習する内容が身についていないか	3.43
1	試験で赤点をとることが多いか	3.40
3	周囲の人への接し方がぎこちないか	3.39
1	英語について困難があるか	3.38
3	友達への接し方が一方的か	3.34

Table 3 「支援に関する調査」における平均得点（得点が高い順）

項 目	平均得点
対人関係の面で、その後の進路（就職や進学）に不安を感じるか	4.14
生徒同士の関係について学ぶ必要性を感じるか	3.94
学習の遅れの面で、その後の進路（就職や進学）に不安を感じるか	3.88
学習面について個別で対応する必要性を感じるか	3.65
教員への接し方について学ぶ必要性を感じるか	3.34
生活面（身だしなみや挨拶等）について支援をする必要性を感じるか	3.02

Table 4 診断の有無による平均得点の違い

	診断なし群	診断あり群
「生徒に関する調査」において群間差が見られた項目の平均得点		
他の生徒や先生とよくからかうか	2.34	1.69*
友達を作ることに興味がなく、自分ひとりの世界を好むか	3.16	2.41*
日常において忘れ物が多いか	3.02	2.41*
「支援に関する調査」における平均得点		
対人関係の面で、その後の進路（就職や進学）に不安を感じるか	4.20	4.24
生徒同士の関係について学ぶ必要性を感じるか	3.96	4.17
学習の遅れの面で、その後の進路（就職や進学）に不安を感じるか	3.87	4.00
学習面について個別で対応する必要性を感じるか	3.71	3.66
教員への接し方について学ぶ必要性を感じるか	3.47	3.24
生活面（身だしなみや挨拶等）について支援をする必要性を感じるか	3.11	2.79

* $p < .05$

2.509, 第3因子が3.023, 第4因子が2.534, 第5因子が3.086であった。また、各因子での得点を従属変数、診断の有無を独立変数として、t検定を行った結果、どの因子に関しても群間で有意な差は認められなかった。

4. 生徒の行動特徴と支援に関する項目の相関

因子分析の結果から得られた5つの因子と、支援に関する項目間について相関を求めた（スピアマンの積率相関係数）。これらの項目間で0.4以上の相関が示された相関係数および有意水準は以下の通りであった。第1因子の「学習面における困難さ」と学習面の個別対応（ $r = .708, p < .01$ ）および学習面に対する不安（ $r = .579, p < .01$ ）、第2因子の「衝動性および不注

意」と生活面における対応（ $r = .570, p < .01$ ）、第3因子の「対人関係の築きにくさ」と生徒同士の関係への対応（ $r = .528, p < .01$ ）および対人関係に対する不安（ $r = .521, p < .01$ ）において、有意な相関関係が認められた。

考 察

本研究では、高等学校における気になる生徒の行動特徴ならびに必要な支援の内容について、調査用紙を用いて検討した。高等学校の教員にとって気になる生徒とはどのような行動特徴を有する生徒なのだろうか。本研究における調査では、気になる生徒の行動は因子分析に

よって5つに分類され、そのうちとりわけ教員が気になる行動として学習面の困難さ、ならびに他者との関係作りの苦手さが挙げられた。学習面においては、活動の順序立ての困難さや話をすることの苦手さ、学習の遅れが目立っており、学習そのものの困難のみならず学校での生活全体に関係するような行動特徴が示された。また、対人関係面については、楽しみや興味を他人と共有しにくい、他人との関わりが一方的など広汎性発達障害の特徴が顕著であった。

診断の有無による結果の違いについて検討したところ、診断あり群に比べて診断なし群で3つの項目で得点が有意に高くなった。各因子の下位尺度得点については有意な差が認められなかったものの、診断あり群に比べて診断なし群の得点は高い傾向にあった。また、本調査での自由記述欄の記載を参照すると、診断なし群の中には気になる行動が見過ごされてきた経緯がある生徒もあり、保護者の理解が得られない場合も多く、有効な支援を受けていない可能性も示唆された。学校との連携がうまくなされていない状況も多く見られ、適切な支援を得られていない場合が多く見受けられた。診断を受けている生徒の中には自分自身がどのような事柄や状況を苦手とするのかを自覚しており、その対応方法を学んできている生徒もいる。

診断を受けるか否かに関わらず、保護者や教員をはじめとする周囲の理解を得ることが生徒への支援の第一歩になる。教員を介して周囲の生徒と関わりを持たせたり、集団行動を通して対人関係を学ぶ機会を与えたり、個々のニーズに合わせながら関わりを持つことが彼らにとって大きな意義を持つだろう。

高等学校で気になる行動を示す生徒は学習面や人間関係でこれまで失敗経験を積み重ねるなどして、過度に自己肯定感が低い生徒も多いことが予測される。そのため、今後は生徒の自尊感情に配慮した支援のあり方について

も考える必要がある。また、高等学校での気になる生徒が社会に出た場合にどういった困難を抱えるのかを理解し、高等学校で行うべき支援について具体的に検討することが重要である。

謝 辞

本調査を実施するにあたり、高等学校の先生方にご協力を賜りました。調査項目の検討を行い、ご意見をくださった先生方、調査を実施してくださった先生方に深謝申し上げます。

引用文献

- American Psychiatric Association (2000). The diagnostic and statistical manual of mental disorders (4th ed. TR). Washington DC, and London, England. (高橋三郎・大野裕・染矢俊幸(訳)(2004). DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル新訂版 医学書院).
- 井澗知美・上林靖子・中田洋二郎・北道子・藤井浩子・倉本英彦・根岸敬矩・手塚光喜・岡田愛香・名取宏美(2001). Child Behavior Checklist/4-18日本語版の開発 小児の精神と神経, 41, 4, 243-252.
- 本郷一夫・相澤雅文・飯島典子・半澤万里・中村佳世(2009). 高校における「気になる」生徒の理解と支援に関する研究 東北大学大学院教育学研究科教育ネットワーク研究室年報, 9, 1-10.
- World Health Organization (1993). The ICD-10 classification of mental and behavioral disorders: Diagnostic criteria for research. WHO. (隔道男・小見山実・大久保善朗・中根允文(訳)(2005). ICD-10 精神および行動の障害—臨床記述と診断ガイドライン 医学書院).